

やまとの名品 天理図書館



ひだか川

江戸時代初期写 1冊

縦17.3cm 横23.7cm

二〇〇四年、紀伊山地の霊場とその参詣道（通称・熊野古道）が世界文化遺産に登録された。この険しい紀伊山地を水源

とする日高川は、安珍・清姫伝説の舞台としても有名である。道成寺にまつわるこの伝説は、

物語として、また能や浄瑠璃、歌舞伎等の題材となって、女性

の激しく恐ろしいまでに一途な恋を描いたものとしてよく知られている。

奈良絵本「ひだか川」も、その一つである。奈良絵本とは、室町時代後期から江戸時代前期頃までに製作された、主として女性・子供向けの絵入り彩色本の総称。中でも本書は横長の

形態に全二十二の絵が簡潔で力強く描かれており、近世ごく初期の代表といわれている。

物語は近江国三井寺の僧賢学が東海道を遠江国橋本宿へ下るところから始まる。この宿の長者の姫と結ばれるという夢のお告げを確かめる旅であった。因縁に導かれるように清水寺で再会し、ついに結ばれるが、暫く後、男は姫を振り切つて修行の為に熊野へ。その後、那智を出て日高川を渡ると、待ち受けていた姫は水に飛び込み追いかけて、みるみる大蛇と化す。懸命に逃げ、ある寺の鐘の中に隠れるが、大蛇は鐘を微塵に碎き、男を掴んで淵へ沈んでいった。



本書は、道成寺伝説を題材としながらも寺の名は著わさず、念仏の功德を説くこともしない。深い悲しみの果てに、二人して水底で終焉を迎える悲恋の物語となっている。

（天理図書館 内藤和子）